

第8節 その他の

1. はじめに

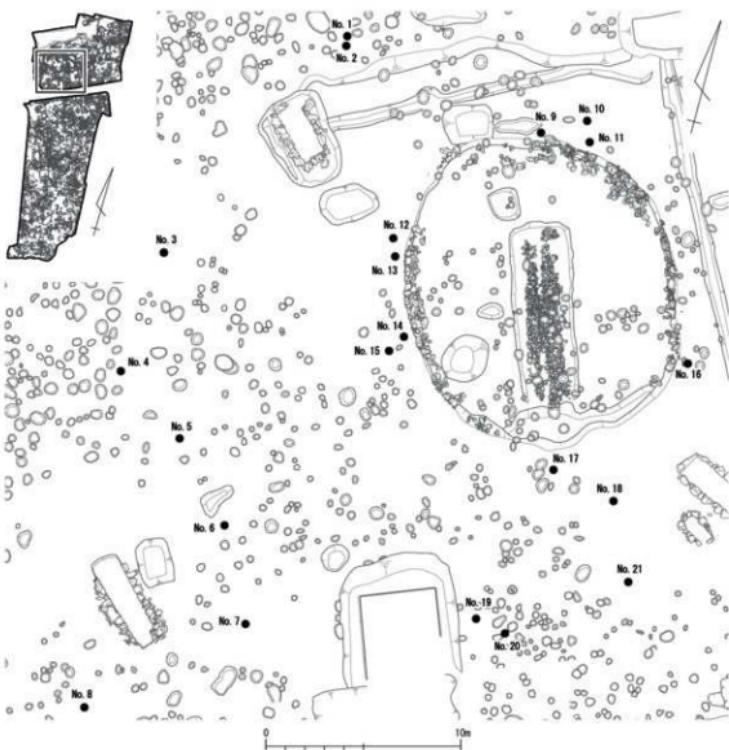
遺構には伴わないが良好な状態で出土した遺物について、出土位置・レベルをトータルステーションを使用して正確に記録していった。これらの遺物についても、基本層序および調査方法を考慮に入れる(第3章第1節)、本来は遺構に伴っていたものと考えられる。したがってこれらの遺物についても、遺構出土遺物に準じるものとして報告していくこととする。なお上記の遺物のなかで、平面的な出土位置と遺構の平面的な位置が重なったものについては、当該遺構出土遺物として扱っている。

2. 土器出土地点

報告するのは、No.01地点からNo.81地点の81地点である(第320図)。

No.01地点(図版23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区北西部(第320図)、No.02地点の北側に近接している(第321図)。須恵器の杯(611)が單



第321図 No.1地点～No.21地点位置図

独で出土している。611は上下が逆になり、土圧で押しつぶされた状態で出土している。近接するNo02地点から出土している杯蓋(612)と、セットであった可能性も考えられる。

出土遺物 杯(611)が出土している。杯c9に分類され、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No02地点(図版23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区北西部(第320図)、No01地点の南側に近接している(第321図)。612が単独で出土している。土圧で押しつぶされた状態で出土している。No01地点出土の杯(611)とセットであった可能性も考えられる。

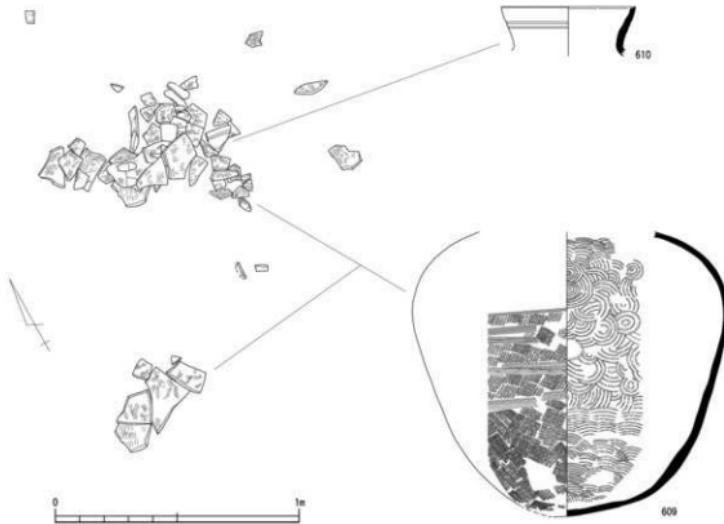
出土遺物 須恵器の杯蓋(612:杯蓋n)が出土している。天井部は弱いヘラナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構V期に位置付けられる(第6章第2節)。

No03地点(図版22・23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区西部中央(第320図)、No04地点の北側に位置する(第321図)。須恵器の甕(609・610)が破片となって出土している(第322図)。甕は大きく2箇所で集中して出土している。出土した甕は、口縁部片(610)と体部片(609)からなるが、その出土状況から本来は1個体であった甕がその場で押しつぶされたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の甕が出土している。口縁部片(610)と体部片(609)からなり、直接の接合関係が認められなかつたため別個体として報告するが、本来は同一個体であったものと考えられる。



第322図 No03地点土器出土状況

610は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する端面を有する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁部外面に2条の沈線が施されている。609は頭部以下が残存する。外面は叩き整形後部分的にカキ目が施され、内面には当て具痕が顕著に残存する(第323図)。

時期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.04地点(図版23 写真図版49・87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.03地点の南側、No.05地点の北西側に位置する(第321図)。613が単独で、完存した状態で出土している。

出土遺物 須恵器の杯蓋(613)が出土している。杯蓋Y5に分類され、天井部外面1/3はヘラ切り後未調整である。

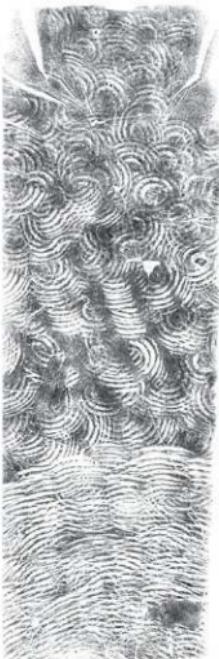
時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる。

No.05地点(図版23 写真図版49・87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.04地点の南東側、No.06地点の北西側に位置する(第321図)。614が単独で、完存した状態で出土している。正立した状態での出土状態である。

出土遺物 須恵器の小瓶(614)が出土している。口縁部の一部を欠く以外完存する。卵形の体部に口縁部が短く直立する。回転ナデにより仕上げられている。体部外面には3条の沈線が施されている。底部の切り離しはヘラ切りにより、その後ナデが加えられている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる。



第323図 609内面拓影

No.06地点(図版23 写真図版87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.05地点の南東側、No.07地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の高杯(615)が出土している。脚部のみ残存する。無蓋高杯Eの脚部で、脚Aaに分類される。残存する限りにおいて、透かしは認められない。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.07地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.06地点の南東側、No.08地点の北東側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の杯A(616)が単独で出土している。杯Abに分類され、底部はヘラ切りにより切り離されている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.08地点(図版23 写真図版88 附表47)

検出状況 北地区南西隅(第320図)、No.07地点の南西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の甕(617)が単独で出土している。底部から体部が完存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、その後下半外面が回転ヘラ削りにより仕上げられている。体部中位や上側には1条の沈線が施され、この沈線上に径1.40cmの円孔が穿たれている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No09地点(図版23 写真図版49 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No10地点の南西側に位置する(第321図)。須恵器の壺(618)が単独で出土している。壺Kの頭部と考えられる。

出土遺物 618は長頸壺の頭部で、中位以下に2条の凹線が施されている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No10地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No09地点の北東側、No11地点の北西側に位置する(第321図)。土師器と須恵器が小片で散乱した状態で出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土しているが、図化できたのは須恵器の杯B(619)に限られる。杯Bcに分類され、内湾気味の体部に対して口縁部が屈曲し、受け口状をなす点が特徴である。底部は、ヘラ切り後に高台が貼り付けられている。

この他土師器の杯Aと壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No11地点(図版23 写真図版49・88 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No09地点・No10地点の南東側に位置する(第321図)。620が内面を上側にして、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯蓋(620)が出土している。杯蓋Y3に分類され、天井部は回転ヘラ切り後、ナデにより仕上げられている。焼成が不十分な製品である。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No12地点(図版23 附表48)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No13地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の杯B(621)が出土している。杯Ba8に分類される。体部から口縁部にかけて直線的である。底部はヘラ切り後ナデにより仕上げられ、その後高台が貼り付けられている。最後に高台周囲が回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No13地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No12地点の南東側、No14地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の椀B(622)が出土している。椀Ba1に分類され、口径16.80cm、器高7.60cmと大型の椀である。底部は高台が貼り付けられた後、回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No14地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No13地点の南東側、No15地点の北東側に位置する(第321図)。

出土遺物 土師器の甕(623)が出土している。甕Gcに分類され、体部上半から口縁部にかけて残存する。外面は、体部が輻方向のハケ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が斜方向のヘラ削り、頭部が横ナデ、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No15地点(図版23 写真図版88 附表47)

検出状況 北地区中央部に位置する(第320図)。No14地点の南西側に位置する(第321図)。頭部以下の甕(624)が完存した状態で単独で出土している。当地は南構1号墳の西側据部にあたることから、624が当該古墳に伴うものであった可能性も考えられる。

出土遺物 須恵器の甕(624)が出土している。甕Dに分類される。底部が平底傾向にあり、体部は玉葱形をなす。体部中位以上は回転ナデにより、体部下半以下は回転ヘラ削りにより仕上げられている。体部中位には1条の凹線が施され、その位置に径8mmの透かし孔が開けられている。また頭部にも1条の凹線が認められる。頭部外面には絞り痕が認められる。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No16地点(図版23 写真図版49 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No17地点の北東側に位置する(第321図)。625が須恵器の甕と隣接して出土している。比較的の形が保たれた状態で出土している。

出土遺物 須恵器の杯B(625)が出土している。杯Ba11に分類され、底部は回転ヘラ切り後、高台が貼り付けられている。

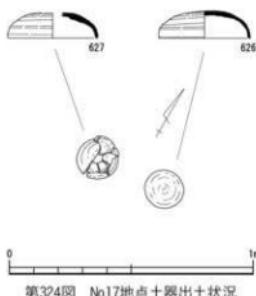
時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No17地点(図版23 写真図版49・88 附表47)

検出状況 北地区中央部南側に位置する(第320図)。No18地点の北西側に位置する(第321図)。須恵器の杯蓋が2個体、ほぼ形が保たれた状態で出土している(第324図)。出土地点が南構1号墳石室入口に近接し、土器の時期及び出土状態から、南構1号墳に伴う遺物と考えられる。詳細については第4章第2節にて詳述する。

出土遺物 須恵器の杯蓋が2点(626・627)出土している。2個体とも回転ナデを基調とし、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。626は杯蓋iに、627は杯蓋rに分類される。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる。



第324図 No17地点土器出土状況

No18地点(図版23 写真図版49・89 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No17地点の南東側に位置する(第321図)。628が完存し、單独で正位の状態で出土している。

出土遺物 土製の壺(628)が出土している。断面無花果形、平面正円形をなし、精良な胎土で、全体的に丁寧につくられている。最大径3.30cm、高さ3.30cmと小型の製品である。頂部は台形錐状をなし、径5mm～7.5mmの紐穴が貫通している。頂部の幅は1.30cmである。頂部を除く全面に沈線が描かれている。明確な規則性は認められない。重量は27.96gである。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.19地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.20地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の壺(629)と甕(630)が出土している。壺は体部中位以下が残存し、体部は球形に近いものと考えられる。底部は回転ヘラナデの後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。体部外面下半部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。甕は肩部から口縁部にかけて残存する。体部外面はカキ目により、口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。体部内面には當て具痕が認められる。

時 期 629は壺Lの下半と考えられることから、南構Ⅷ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.20地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.19地点の南東側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の壺(631)が出土している。口縁部のみの残存で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.21地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.18地点の南東側に位置する(第321図)。

出土遺物 土師器の椀(632)が出土している。椀Caに分類され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時 期 出土遺物から南構Ⅷ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.22地点(図版24 写真図版148 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.16地点の南東側、No.23地点の南西側に位置する(第325図)。

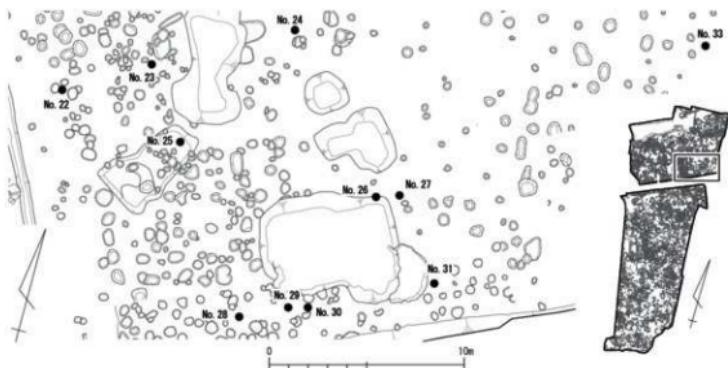
出土遺物 緑釉陶器の椀(633)が出土している。椀d2に分類され、内湾気味に立ち上がる体部に対して口縁部が短く外反している。高台は底部と合わせて回転ヘラ削りにより削り出され、輪高台をなしている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部外面を除き施釉が認められる。焼成は硬陶である。

時 期 出土遺物から南構Ⅸ～Ⅹ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.23地点(図版24 写真図版50・90 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.22地点の北東側、No.25地点の北西側に位置する(第325図)。634が単独で出土している。比較的形が保たれた状態での出土状況である。

出土遺物 土師器の椀(634)が出土している。椀Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離さ



第325図 No.22地点～No.31地点・No.33地点位置図

れ、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.24地点(図版24 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No.23地点の北東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の榤(635)が出土している。榤Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。他は回転ナデを基調としているが、体部下半外面はナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.25地点(図版24 写真図版90 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.23地点の南東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の榤(636)が出土している。底部は平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。体部は直線的に立ち上がり、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部と体部の境外面の一部は横ナデにより仕上げられている。底部外面には、外縁部に指腹で押えた圧痕3箇所と、ヘラ記号が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ～Ⅵ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.26地点(図版24 写真図版50 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.27地点の西側に位置する(第325図)。土師器の杯が比較的形が保たれた状態で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(637)が出土している。杯Ad4に分類される。平底の底部に対して、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。全体的に器壁が厚く仕上げられている。内外面とも回転ナデを基調とし、底部はヘラ切り後ナデにより仕上げられている。体部下端外面にはヘラナデが認められる。内外面には赤彩が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ－2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.27地点(図版24 写真図版50・90 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No.26地点の東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器の把手(638)が出土している。甕の把手と考えられる。指ナデを基調とし、体部との接合部付近はハケにより仕上げられている。体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.28地点(図版24 写真図版90 附表47)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.29地点の南西側に位置する(第325図)。土師器がほぼ完形に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(639)が出土している。杯Aa1に分類される。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、周囲は静止ヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、外端部を中心とした回転ナデにより内傾する端面が認められる。外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.29地点(図版24 写真図版50・91 附表47)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.28地点の北東側、No.30地点の西側に位置する(第325図)。640がほぼ完形に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯A(640)が出土している。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.30地点(図版24 附表48)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.29地点の東側に位置する(第325図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 怀Aが1個体(642)出土している。杯Adに分類される。底部から体部にかけて残存し、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

須恵器 梶Bが1個体(641)出土している。梶Baに分類される。高台は全体的に丸味を帯び退化傾向にあり、その外側ラインの延長上が体部となっている。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、その後回転ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VII期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.31地点(図版24 写真図版50・91 附表48)

検出状況 北地区中央部南端(第320図)、No.27地点の南東側に位置する(第325図)。643の1個体が逆位の状態で出土している。643を確認した時点では底部を確認できなかったが、その後接合する底部片を確認した。このため、当初は完存した状態で置かれていたものと考えられる。

出土遺物 土師器の梶(643)が出土している。梶Caに分類される。底部は回転糸切りにより切り離され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。外面の引き上げ痕が顕著である。外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.32地点(図版24 写真図版81・91 附表48・98)

検出状況 北地区北東部、No.33地点の北側に位置する(第320図)。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯A(644)・杯(645)・皿(647)・壺(646)の各器種が出土している。杯Aの644は底部から口縁部にかけて残存するが、内外面とも摩滅のため調整は観察できない。645は杯Aeに分類される。回転ナデを基調としているが、体部下半外面はナデにより仕上げられている。皿の647は口縁部のみ残存する小片である。底部付近外面にヘラ削りの痕跡がわずかに観察できる。内外面には赤彩が認められる。壺の646は口縁部のみの残存で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯B(648)と壺(649・650)が出土している。杯Bは底部を静止ヘラ削り後高台が貼り付けられ、最後に回転ナデにより仕上げられている。

壺は649と650の2点出土している。いずれも口頭部のみの残存である。649は壺Lの口縁部と考えられる。焼成状況・胎土の特徴から陶邑産の可能性が考えられる。650も壺Lの口縁部と考えられる。

土製品 土錐が2点(651・652)出土している。いずれも環状土錐で、中央部に最大径を有する。2点とも手づくねにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.33地点(図版24・25 写真図版81・91 附表48・98)

検出状況 北地区南東部に位置する(第320図)。No.27地点の北東側に位置する(第325図)。比較的小片となった土器が一箇所に集中した状態で出土している(第326図)。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 鉢・壺・鍋が出土している。

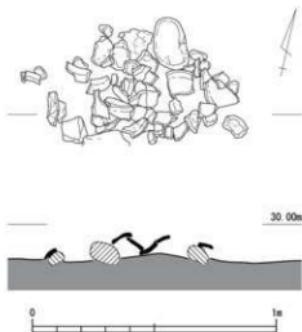
鉢は653の1個体が出土している。鉢Dに分類され、体部から口縁部にかけて内済気味に立ち上がる。体部下半外面を横方向のヘラナデ以外、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面が赤色に発色している。

壺は4個体(654~657)出土しているが、いずれも口縁部を中心に残存し、655が壺Fbに、他が壺Ecに分類される。口縁部は外反気味に屈曲し、端部が上方へつまみ上げられている。体部内面は横方向のヘラ削り、外面は縱方向を主体としたハケ、口縁部内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。ただし657については、口縁部内面が横方向のハケにより仕上げられている。また、657の頭部外面には弱い沈線が施されている。

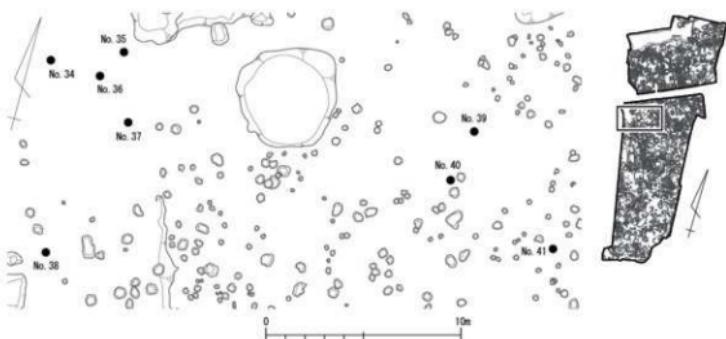
鍋は659の1個体が出土している。鍋Baに分類され、口縁部を中心へ残存する。外面は縱方向、内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。また体部内面にはハケの後、横方向のヘラ削りが部分的に施されている。

土製品 土錐が1点(658)出土している。完存する個体で、ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第326図 No.33地点土器出土状況



第327図 No.34地点～No.41地点位置図

No.34地点(図版25 写真図版50・92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.35地点の南西側、No.36地点の西側に位置する(第327図)。横瓶と長頭壺が単独で出土しており、その出土状況からその場で押し潰されたものと考えられる。なお当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の壺が2点(660・661)出土している。

660は横瓶である。ほぼ全体が残存する個体で、体部は叩き整形後カキ目により仕上げられている。内面には当て具痕が認められるが、部分的にナデが加えられている。最後に口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。最大径部には円盤充填痕が認められる(第328図)。

661は広口長頭壺の一部と考えられる。頭部下端から体部下半にかけて残存する。内外面とも回転ナデを基調とし、頭部と体部下半外面にはカキ目が加えられている。体部中位外面には2条の凹線が引かれ、その間に刻み目がされ、最後にカキ目により仕上げられている。



第328図 660内面充填痕

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.35地点(図版25 写真図版92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.34地点・No.36地点の北東側に位置する(第327図)。杯蓋と杯がセットで出土している(第329図)。No.34地点同様、当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の杯蓋3個体(662～664)と杯1個体(665)・高杯



第329図 No.35地点土器出土状況

(666)が出土している。杯蓋は、662の天井部1/3が回転ヘラ切り後未調整であるのに対し、663は回転ヘラ削りにより仕上げられている。その範囲は天井部の1/3に限られる。杯は底部が回転ヘラ切り後未調整である。666は、底部付近にわずかに脚部への変換部を確認できたため、高杯と判断したものである。杯部下半は回転ヘラ削りにより仕上げられ、接合部付近は回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.36地点(図版25 写真図版50・92 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.34地点の南東側、No.35地点の南西側、No.37地点の北西側に位置する(第327図)。667の1個体が完存する形で出土している。No.34地点・No.35地点同様、当地点が南構10号墳第1石室開口部の南側にあたることから、当該石室に伴う遺物の可能性が考えられる(後述: 第4章第11節)。

出土遺物 須恵器の杯蓋が1個体(667)出土している。杯蓋mに分類され、天井部の1/2が回転ヘラ削りにより仕上げられている。口径17.15cmを測る大型品である。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.37地点(図版25 写真図版93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.36地点の南東側に位置する(第327図)。破片が1箇所に集中した状態で出土している。本来は完存していたものが、土圧等で押し潰されたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の壺が1個体(668)出土している。広口壺に分類されるもので、完形に復元された個体である。内外面とも回転ナデを基調とし、その後カキ目が施されている。体部下半は回転ヘラ削りにより仕上げられ、その後中位付近に静止ヘラ削りが加えられている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.38地点(図版25 写真図版51 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.37地点の南西側に位置する(第327図)。669の1個体が底部のみ単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯Bが1個体(669)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、回転ナデにより仕上げられている。底面には高台貼り付けの際の爪先の当たりが認められる。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.39地点(図版25 写真図版51・93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.40地点の北側に位置する(第327図)。完存する個体が単独で出土している。

出土遺物 須恵器の壺Mが1個体(670)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、その後回転ナデにより仕上げられている。体部から口縁部にかけても回転ナデを基調として仕上げられている。その後体部下半外面は回転ヘラ削りにより仕上げられ、最後にナデが加えられている。体部外面には2条の沈線が認められるが、1条は途中で途切れている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.40地点(図版25 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.39地点の南側に位置する(第327図)。

出土遺物 須恵器の皿が1個体(671)出土している。皿Acに分類される。口縁部は斜上方に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられているが、底部内面はナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.41地点(図版25 写真図版51・93 附表48)

検出状況 南地区北西部(第320図)、No.40地点の南東側に位置する(第327図)。672が比較的小片で出土している。

出土遺物 土師器の皿が1個体(672)出土している。皿Abに分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。口縁部内外面は丁寧な回転ナデにより仕上げられている。内外面に赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.42地点(図版76 写真図版51・186 附表100)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.43地点の南西側に位置する(第330図)。

出土遺物 磨石(S11)が出土している。比較的扁平な自然石を利用した製品で、完存する。1面に磨き痕が認められる。

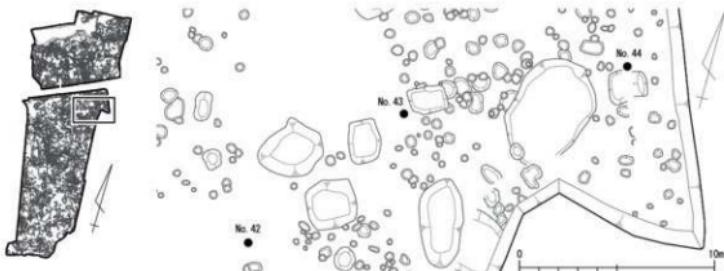
時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No.43地点(図版25 写真図版93 附表49)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.44地点の南西側に位置する(第330図)。

出土遺物 土師器の壺(673)が出土している。壺Ecに分類され、体部は球形に近い形態である。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が中位以下を縱方向、肩部付近を横方向のヘラ削り、口縁部を横方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。外面全面に煤の付着が認められるが、特に体部下半の煤の付着が顕著である。

時期 出土遺物から南構Ⅰ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



330図 No.42地点～No.44地点位置図

No.44地点(図版26 写真図版51 附表49)

検出状況 南地区北東部(第320図)、No.43地点の北東側に位置する(第330図)。674の一部が単独で出土している。

出土遺物 土師器の鍋(674)が出土している。鍋Abに分類され、体部から口縁部にかけて残存する。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部から口縁部にかけて横方向のハケの後、体部が部分的に横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.45地点(図版26 写真図版93 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.46地点の北側、No.47地点の北西側に位置する(第331図)。

出土遺物 須恵器の壺(675)が出土している。底部から肩部付近まで残存し、壺Lの一部と考えられる。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられている。外面は回転ヘラナデ後回転ナデにより仕上げられ、下半について静止ヘラ削りが加えられている。内面は回転ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第331図 No.45地点～No.52地点位置図

No.46地点(図版26 写真図版93・149 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.45地点の南側、No.47地点の南西側に位置する(第331図)。

出土遺物 土師器と綠釉陶器が出土している。

土師器 托(676)が出土している。底部から体部にかけて残存し、底部は回転条切りにより切り離されている(第332図)。体部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

綠釉陶器 盆(677)が出土している。底部を中心には輪高台をなし、回転ヘラ削りにより削り出されている。他は回転ナデにより仕上げられている。

高台より内側を除き、施釉が認められる。焼成は軟陶である。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第332図 676底部拓影

No.47地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.45地点の南東側、No.46地点の北東側に位置する(第331図)。

出土遺物 土師器の壺(678)が出土している。壺Fcに分類される。体部から口縁部にかけて残存し、体部は半球形をなすものと考えられる。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部から口縁部にかけて横方向のハケの後、体部には部分的なヘラナデが加えられている。最後に口縁部が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.48地点(図版26 写真図版51・94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第320図)。No.49地点の北側に位置する(第331図)。679がほぼ完存に近い状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯(679)が出土している。杯h4に分類される。底部は回転ヘラ切り後ナデが加えられている。底部と体部の境には補助ケズリが認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.49地点(図版26 写真図版51・94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.48地点の南側に位置する(第331図)。680と681がそれぞれ完存に近い状態で、近接して出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 梗が1個体(681)出土している。梗Ad4に分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。内面は回転ナデにより仕上げられている。外面については摩滅のため観察できないが、回転ナデと考えられる。

須恵器 杯蓋(680)が出土している。杯蓋Y4に分類され、天井部は回転ヘラ切り後未調整である。

時期 680は南構Ⅵ-2期に、681は南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.50地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.49地点の南側に位置する(第331図)。682と683の一部が重なるようにして出土している。比較的小片となった状態での出土状況である。

出土遺物 土師器の壺(682)と甕(683)が出土している。壺は分類される。壺の体部は、外面がハケ、内面が横方向のヘラ削りとハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。甕は底のコーナー部分を中心に残存する。底は焚口部に貼り付けられ、横方向のナデにより仕上げられている。焚口部は、外面がハケ、内面が縱方向のヘラ削りにより仕上げられている。底の幅は6.00cmを測る。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.51地点(図版26 写真図版187 附表100)

検出状況 南地区中央部西側(第320図)、No.52地点の南側に位置する(第331図)。

出土遺物 磨石が1点(S12)出土している。断面方形をなす紡錘形の自然石を利用したものである。完存する個体で、両端部に使用痕(磨き痕)が認められる。

時期 出土遺物から南構I期に位置付けられる。

No.52地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.51地点の北側に位置する(第331図)。比較的小片で出土している。

出土遺物 土師器の杯A(684)が出土している。杯は分類され、底部は回転ヘラ切り後丁寧なヘラナデにより仕上げられている。内外面には赤彩が認められる。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.53地点(図版26 写真図版51 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.54地点の西側に近接して位置する(第333図)。土器はやや小片となって出土しているが、当初は形のある状態であったものと考えられる。

出土遺物 弥生土器のナデ甕(685)が出土している。体部は、外面が斜方向のハケ、内面がハケの後ヘラ削りにより仕上げられている。最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられ、複合口縁をなしている。

時期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.54地点(図版26 写真図版94 附表49)

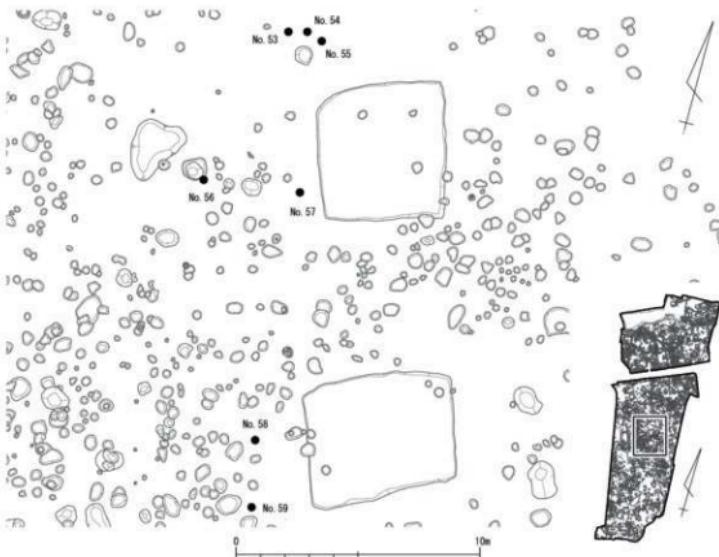
検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.53地点の東側、No.55地点の北西側に近接して位置する(第333図)。686が土圧で押しつぶされた状態で出土している。

出土遺物 弥生土器の鉢(686)と高坏(687)が出土している。

鉢は台付鉢に分類されるもので、口縁部は複合口縁をなす。体部から口縁部にかけては内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。台部はナデにより仕上げられている。ヘラミガキにより仕上げられていることから鉢に分類したが、外面に煤の付着が認められるため甕の可能性も考えられる。

高坏は脚裾部が残存する。内外面とも横方向を主体としたハケにより仕上げられ、外面は縦方向のヘラミガキが加えられている。

時期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第333図 No.53地点～No.59地点位置図

No.55地点(図版26 写真図版52・94 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.54地点の南東側に近接して位置する(第333図)。口縁部片が単独で出土している。No.53地点・No.54地点とともに一つの遺構であった可能性が考えられる。

出土遺物 弥生土器のナデ甕に分類される688が出土している。体部は、外面が横方向のハケ、内面が横方向のヘラナデにより仕上げられ、その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅲ～Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.56地点(図版26 写真図版52・187 附表100)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.57の西側に位置する(第333図)。

出土遺物 砥石が1点(S13)出土している。完存するものではないが、自然石を利用したものである。平坦な1面が利用されている。一部に敲いた痕も認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅳ～VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.57地点(図版26 写真図版52 附表49)

検出状況 南地区中央部北側(第320図)、No.56地点の東側に位置する(第333図)。

出土遺物 土師器の甕(689)が出土している。甕Fcに分類され、口径34.60cm、最大径35.50cmを測る大型の土器である。体部は、外面が縦方向のハケ、内面が横方向の後縦方向のハケにより仕上げられている。口縁部は、内面を横方向のハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅲ～Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.58地点(図版26 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.59地点の北西側に位置する(第333図)。

出土遺物 須恵器の皿B(690)が出土している。口径25.70cmと復元される大型品である。体部下端外面は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.59地点(図版26 写真図版52 附表49)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.58地点の南東側に位置する(第333図)。691が底部を中心に逆位の状態で、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の壺(691)が出土している。底部を中心には存する。底部はナデの後高台が貼り付けられている。底部内面は強い指オサエヒナデにより仕上げられている。体部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより仕上げられている。全体的に雑なつくりである。

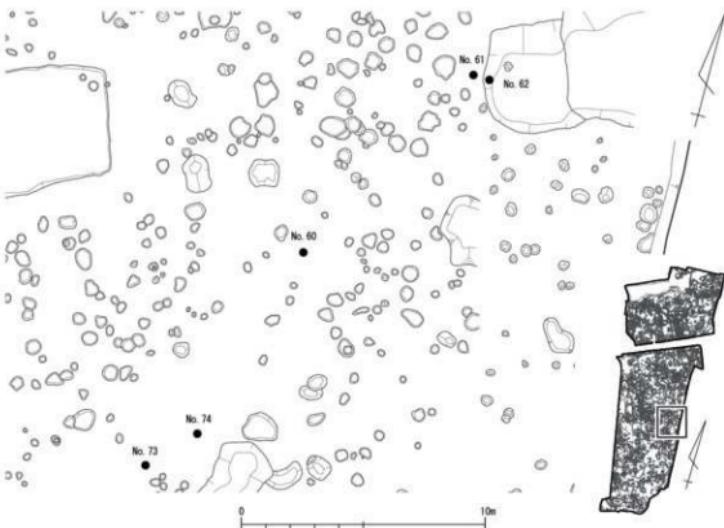
時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.60地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.61地点の南西側に位置する(第334図)。土器の残存状況から、当初は完形の状態であったものと考えられる。

出土遺物 須恵器の杯蓋(692)が出土している。ほぼ完存に近い個体で、杯蓋Y6に分類される。天井部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第334図 No.60地点～No.62地点・No.73地点・No.74地点位置図

No61地点(図版26 写真図版94 附表49)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No62地点の西側に近接して位置する(第334図)。

出土遺物 須恵器の杯Bの1個体(694)が出土している。杯Bbに分類される。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反傾向にある。底部は回転ナデの後高台が貼り付けられている。体部外面下端は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅱ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No62地点(図版26 写真図版187 附表100)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No61地点の東側に近接して位置する(第334図)。

出土遺物 敲石もしくは台石と考えられるS14が出土している。平面三角形をなす自然石を利用したもので、完存する。平坦面に敲打痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No63地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

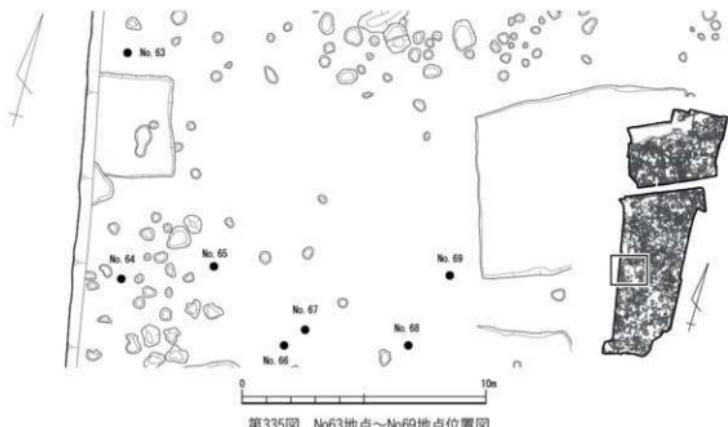
検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No64地点の北側に位置する(第335図)。数個体の土器が一箇所に集中して出土しているが、後述するように土器に時期差が認められることから、一括性はないものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺と杯Aが出土している。

壺は2個体(698・699)出土している。2個体とも壺Gcに分類され、口縁部は「く」字形をなす。体部は、外面が縱方向のハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。その後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。また698の口縁部内面には横方向のハケが認められる。

杯Aも2個体(696・697)出土している。696は杯Ad4に分類され、体部から口縁部にかけて直線的で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。一方697



は杯Af4に分類され、部体が内湾傾向にあり、器壁が厚い傾向にある。底部は回転系切りにより切り離されている。底部内外面に凹凸が認められ、全体的に稚拙なつくりである。外面には赤彩が認められる。

須恵器 杯B蓋(700)・杯A(701)・壺(702)が出土している。700は杯B蓋Acに分類され、天井部から口縁部にかけて大きく屈曲している。天井部全体が回転ヘラ削りにより仕上げられ、つまみの剥離痕が認められる。701は杯Akに分類される。器壁全体が厚い傾向にあるとともに、粗い胎土である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、板目状の圧痕が認められる。702は壺Bの一部と考えられる。底部の切り離しはヘラ起こしによっている。部体外面は、回転ヘラ削りの後回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No64地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No63地点の南側、No65地点南西側に位置する(第335図)。703がほぼ完形に近い状態で、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯が1個体(703)出土している。底部の2/3が回転ヘラ削りにより仕上げられ、一部粗いナデが加えられている。口縁端部は丸くおさめられている。器壁が全体的に厚い傾向にある。

時 期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No65地点(図版27 写真図版52・95 附表49)

検出状況 南地区中央部西端(第320図)、No64地点の北東側に位置する(第335図)。704が土压で押しつぶされた状態で単独で出土している。

出土遺物 須恵器の高杯が1個体(704)出土している。無蓋高杯Dbに分類され、杯部は杯形をなしていない。脚部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯底部内面には円弧を描くようなナデが認められる。脚部に透かし孔は認められない。杯部を中心に器壁が厚く仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No66地点(図版27 写真図版95 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No67地点の南西側に近接して位置する(第335図)。705が単独で出土している。当初は完存する形であったものと考えられる。

出土遺物 土師器の杯が1個体(705)出土している。杯Cbに分類されるもので、ほぼ完存する。底部は平底をなし、半球形をなす体部に口縁部が短く「く」字形に屈曲している。底部から体部外面は指オサエとナデ、内面は横ナデ後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。最後に内面に放射状に暗文が施されている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No67地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No66地点の北東側に近接して位置する(第335図)。

出土遺物 須恵器の高杯が1個体(706)出土している。脚部が完存する状態で出土している。無蓋高杯Hの脚Dbと考えられる。脚部には透かし孔は認められない。

時 期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.68地点(図版26・27 写真図版96 附表49・50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.67地点の東側、No.69地点の南側に位置する(第335図)。

出土遺物 土師器の椀が3個体(693・695・707)出土している。693は底部が平底をなす椀で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部の切り離しは観察できない。695は輪高台を有する椀で、底部を中心には残存する。底部は回転糸切り後高台が貼り付けられている。高台高1.30cmと大型の椀である。707は平底をなすが、平高台の痕跡が認められる。回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土遺物から南構区-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.69地点(図版27 写真図版52・96 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.68地点の北側に位置する(第335図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺が1個体(710)出土している。壺Fcに分類され、体部はやや長胴傾向にある。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は体部から口縁部にかけて横方向のハケにより仕上げられている。内面には焦げの付着が認められる。

須恵器 椭が2個体(708・709)出土している。2個体とも椭Aalに分類されるものである。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、平底をなしている。2個体とも器壁が厚く仕上げられている。708の内面には煤の付着が認められる。

時期 出土遺物から南構区-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.70地点(図版27 写真図版53 附表50)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.72地点の南西側に位置する(第336図)。高坏の坏部が単独で出土している。

出土遺物 土師器の高坏(711)が出土している。高坏Beに分類され、坏部のみ残存する。体部は外面が縱方向のハケの後口縁部付近が指オサエ、内面が横方向のハケの後斜方向のヘラミガキ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。内面のヘラミガキはわずかに暗文状をなしている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



No.71地点(図版84 写真図版196 附表100)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.72地点の北西側に位置する(第336図)。

出土遺物 台石(S51)が出土している。長楕円形をなす自然石を利用したもので、上面に使用痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。



第337図 S51出土状況

No.72地点(図版84 写真図版196 附表100)

検出状況 南地区中央部(第320図)、No.71地点の南側、No.70地点の北東側に位置する(第336図)。

出土遺物 台石(S49)が出土している。扁平な自然石を利用したもので、上面に使用痕が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅰ期に位置付けられる。

No.73地点(図版27 写真図版96・97 附表50)

検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.74地点の南西側に位置する(第334図)。

出土遺物 土師器の皿が4個体(712~715)出土している。

712は口縁部のみの残存で、内外面とも横ナデにより仕上げられている。714と715は皿Ad4に分類されるもので、手づくね成形によりつくられている。713は皿Ad3に分類される。底部から体部にかけての外面が指オサエとナデにより仕上げられ、他は横ナデにより仕上げられている。内面に煤の付着が顕著に認められ、灯明皿としての使用が考えられる。

714も手づくね成形によるものであるが、体部から口縁部にかけて内湾傾向にある。調整は713と基本的には同じであるが、底部内面はナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構X-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.74地点

(図版27 写真図版53・97 附表50)

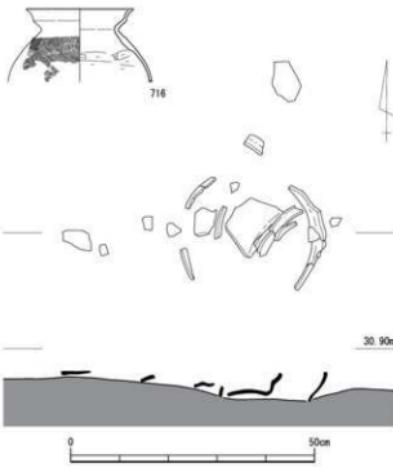
検出状況 南地区中央部東側(第320図)、No.73

地点の北東側に位置する(第334図)。716の小片が一箇所に集中した状態で出土している(第338図)。その出土状況から、土器がその場で押しつぶされたものと考えられる。

出土遺物 土師器の甕(716)が出土している。

甕Cbに分類される。肩部から口縁部にかけて残存し、口縁部は複合口縁をなす。体部外表面はハケ、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。肩部から頸部にかけての内面は、横方向のナデにより仕上げられている。

時期 南構IV期に位置付けられる。



第338図 No.74地点土器出土状況

No.75地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部南西側(第320図)、No.76地点の西側にあたる(第340図)。小片が散乱した状態で出土している。

出土遺物 須恵器の蓋(717)が出土している。杯Bの蓋と考えられるが、つまみの有無は確認できない。内外面とも回転ナデが基本であるが、天井部と口縁部の間は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.76地点(図版27 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.77地点の西側にあたる(第340図)。

出土遺物 土師器の壺(718)と鉢(719)が出土している。718は壺Ecに分類され、口縁部を中心に残存し、外面は縱方向、内面は横方向のハケの後、外面が横ナデにより仕上げられている。体部の一部が観察でき、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。719は鉢Bbに分類され、体部内面を横方向のヘラ削り後口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。体部外面は摩滅のため調整は観察できない。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.77地点(図版27 写真図版53・97 附表50)

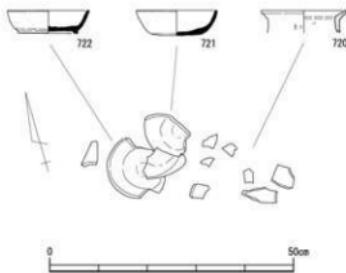
検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.76地点の東側に位置する(第340図)。須恵器と土師器が出土しているが、須恵器は比較的形をとどめた状態で、土師器は小片となった状態で出土している(第339図)。須恵器に関しては、当初から形が保たれた状態で置かれていたものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺(720)が出土している。口径13.70cmと小型の壺で、壺Gdに分類される。直立する体部に対して口縁部が斜上方に屈曲している。体部外面を縱方向のハケの後ナデ、内面を斜方向(右上がり)のヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。頭部内面にはヘラナデが施されている。

須恵器 杯A(721)と杯B(722)が出土している。721は杯Adに分類され、底部は回転ヘラ切りにより切り離され、体部外面は弱いヘラナデにより仕上げられている。722は杯Ba10に分類され、回転ヘラ切り後高台が貼り付けられ、底部外面には爪圧痕が認められる。両個体とも器底が厚く仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



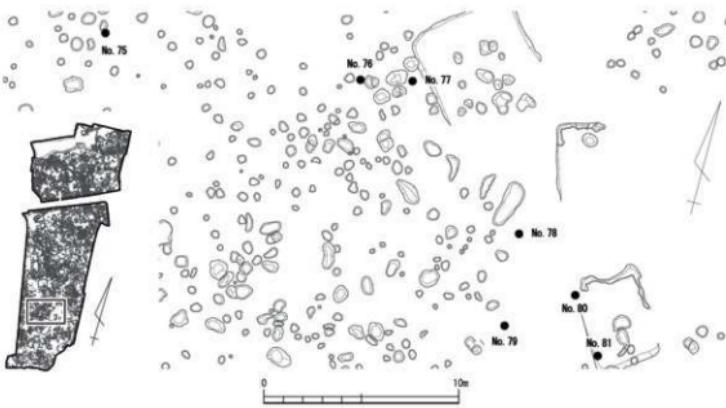
第339図 No.77地点720~722出土状況

No.78地点(図版28 写真図版97 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.79地点の北側にあたる(第340図)。第1次調査で出土した遺物である。比較的小規模な破片が散乱した状態で出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺・壺・高坏が出土している。壺は723と725の2個体が出土している。723は壺Aaに分類さ



第340図 No.75地点～No.81地点位置図

れ、複合口縁壺の口頭部である。外面とも横ナデにより仕上げられている。725は体部から頭部にかけて残存する。外面はナデにより仕上げられている。内面は、下半部が横方向のヘラ削り、中位が縱方向のヘラナデ、上半部から頭部にかけてがナデにより仕上げられている。

甕は724の1個体が出土している。甕Baに分類されるいわゆる山陰系の甕である。体部内面が横方向のヘラ削りによる以外、横ナデにより仕上げられている。

高坏は726と727の2個体で、脚部を中心し残存する。726は脚部が中空タイプである。脚部外表面が、縱方向のハケの後同方向のヘラミガキ、内面は脚柱部が横方向のヘラナデ、裾部はハケの後指オサエとナデにより仕上げられている。坏部は外表面がナデにより仕上げられ、内面には暗文が認められる。727は脚部が中空タイプで、坏底部に挿入されている。脚部外表面は、脚柱部を中心に縱方向のヘラナデの後裾部が横ナデにより仕上げられている。内面は裾部が指オサエにより仕上げられている。脚柱部には絞り痕が認められる。また、坏部内面には放射状の暗文が認められる。

須恵器 728の杯Aの1個体が出土している。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。
時 一期 出土遺物から南構III-1期に位置付けられる(第6章第2節)。杯Aは混入と考えられる。

No.79地点(図版28 写真図版98 附表50)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.78地点の南側、No.80地点の南西側にあたる(第340図)。729がほぼ完存した状態で、口縁部を下側にして単独で出土している。

出土遺物 須恵器の平瓶(729)が出土している。内外面とも回転ナデを基調とし、底部から体部はカキ目により仕上げられている。体部下半と肩部付近の一部には、カキ目の後ナデが加えられている。頭部には、径1.5cmの鉢状の浮文が2箇所に貼り付けられている。

時 一期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

No.80地点(図版28・29 写真図版97・99 附表50・51)

検出状況 南地区中央部南側(第320図)、No.79地点の北東側、No.81地点の北西側に位置する(第340図)。